

# 日蓮大聖人御書全集

くぼのあまごぜんごへんじ

## 窪尼御前御返事

そらみぎようしよ こと

(虚御教書の事)

新版  
1978  
〜  
1979

くぼのあまごぜんごへんじ そらみぎようしよ こと

# 窪尼御前御返事 (虚御教書の事)

こうあんき くぼのあま

弘安期 窪尼

ちまきごわ たかななじつぽん さけ 筒 た お

粽五把・筭十本・千日ひとつつ、給び了わんぬ。

そうら 長 雨 降 夏 ひ 長

いつものことに候えども、ながあめふりてなつの日なが

やま 深 道 茂 踏 分 ひと そうら

し。山はふかく、みちしげければ、ふみわくる人も候わぬ

時 鳥 付 おん 声 有 難

に、ほととぎすにつけての御ひとこえ、ありがたし、あり

がたし。

熱 原 こと 今 度 思 前

さては、あつわらの事、こんどをもっておぼしめせ。さき

虚 ごと 守 殿 ひと 言 付 詳

もそら事なり。こうのとは、「人のいいしにつけて、くわ

尋

ごぼう

流

浅

しくもたずねずしてこの御房をながしけること、あさまし

思

許

たま

後

科

とおぼして、ゆるさせ給いてののちは、させるとがもなく

怨

ては、いかんがまたあだせらるべき。

末

ひとびと

ほけきよう

こころ

怨

上

謗

すえの人々の、法華経を心にはあだめども、うえにそし

思

こと

被

ひと

怨

らばいかんがとおもいて、事にかずけて人をあだむほどに、

前

々

虚

ごと

露

そうろう

虚

かえりてさきざきのそら事のあらわれ候ぞ。これはそら

御教書

もう

見

前

推

そうろう

みぎようそと申すことは、みぬさきよりすいして候。

佐渡くに

さんど

そうろう

さどの国にても、そらみぎようそを三度までつくりて候い

しぞ。

これにつけても、上と国との御ため、あわれなり。木の

下 虫 食 倒 師子の中のむしの師子

したなるむしの木をくらいたおし、師子の中のむしの師子

く 失 こうのとの ご 恩 過 ひとびと

を食らいうしなうように、守殿の御おんにてすぐる人々が、

こうのとの おんい 借 いっさい ひとびと 脅 惱

守殿の御威をかりて、一切の人々をおどし、なやまし、

煩 そうろう かみ おお ほげきよう うしな くに

わずらわし候うえ、上の仰せとて法華経を失って、国も

破 しゆ うしな かえ おのおの み 滅 浅

やぶれ、主をも失って、返って各々が身をほろぼさんあさ

ましさよ。

にちれん 卑 きよう ぼんてん たいしゃく にちがつ してん

日蓮はいやしけれども、経は梵天・帝釈・日月・四天・

てんしょうだいじん やはただいぼさつ 守 たも おんきよう ほげきよう

天照太神・八幡大菩薩のまぼらせ給う御経なれば、法華経

方 怨 ひとびと つるぎ 吞 ひ て 握  
のかたをあだむ人々は、 剣をのみ、 火を手になぎるなるべ  
し。これにつけても、いよいよ御信用のままさらせ給うこと、  
尊 そうろう そうろう  
とうとく候、とうとく候。

ごがつみつか  
五月三日

にちれん かおう  
日蓮 花押

くぼのあまごへんじ  
窪尼御返事